

# 一般社団法人北海道林産技術普及協会「60周年記念講演」(2013.4.19)から 「100億人の地球の話」～近代の終わるとき～

地方独立行政法人北海道立総合研究機構 理事長 丹 保 憲 仁



## ■はじめに

紹介をいただきました丹保でございます。少し時間を頂きましてこの標題「100億人の地球の話」をいたします。地球が満杯になるという状況が近づいておりますので何が起こるかよくわかりませんけれども、おそらく100億人前後で何かが起こるはずですのでその近くの話を少ししてみたいと思います。そして今そのことが前提になって、世界中が大変難しいところを動いております。たぶん人類史上で一番難しいところを人類が動いているんだろうと思いますけれども、本当にそれを十分にご説明できるかどうかわかりませんが、色々考えてきておりましたことをお話を聞いてみたいと思っております。



林産試験場が日頃お世話になっておりまして本当にありがとうございます。北海道立総合研究機構というのができて今度4年目になるわけでございますけれども、ようやく北海道に総合的にものを考え続ける組織ができましたので、これから色んなことが展開していくと思います。私も北海道大学をはじめ色々な大学で長らく仕事をして参りまして、長い時間で横断的にものを見るということがいかに大事であるかということを身にしみて感じて参りました。

## ■地球は大きいと思っていた

地球というのはもうできてから46億年経っております。生物が、非常に小さな生物から発生してから30億年ぐらいになります。そして人間共がでてきて、人間といつても色々な人間がいるわけですが我々のような新しい型のホモサピエンス、新型の人類ができて約20万年、それが動き出して10万年。その歴史

が永久だったことはないですから、何が起こるだろうかという風なことを考えて、生きていかなくちゃいけないわけです。地球は大きいと思っておりました。大きさは変わってないんですけどもそこで色々なことがありまして、恐竜がはびこったり今はホモサピエンスという人間がはびこっております。それはびこったことによって地球が相対的に小さなものになってしまった。これは実は人間の挙動が地球の色々なことにかなり影響するところまで来てしまったと云うことを意味します。恐竜が地球に影響を及ぼしたということはほとんどないと思います。ところが、人間は明らかに地球に色々な影響を及ぼしているぐらいの力量を持っていました。

## 地球は大きいと思っていたのに！

- ・近代の大成長が地球を相対的に小さなものにしてしまった（過密化：環境容量・成長の限界）
- ・近代の構造的帰結として、地球規模で文明の大都市化が起こっている（財貨の獲得、情報化、金融経済化）
- ・グローバリゼーション（成長領域と成熟領域の二分化、相互依存）：植民地化で生じた地球の時間軸の歪みの解消と利用（新植民地的展開と中心部の衰弱）
- ・近代の終焉（新時代への模索）
- ・人類は苦労し始めている
- ・文明転換（自然共生と人間活動抑制：量的成長の禁欲）

炭酸ガスの濃度増加による地球温暖化という話も出ておりますけれども、それもどこまで本当かはよく分かりません。色々なことを考えると、そういうことが起こるだろうということは分かりますけれども、我々の持っている科学の力というものは知れたものでして、ある考え方立って色々な情報を集めて整理して、説明してみたら説明ができたというだけで、それが真理であるという保証はありません。科学というのはそんなに立派なものでもなければ、頼りになるものでもない。にもかかわらず我々はそれを唯一の頼りにして近代という時代を作ってまいりました。したがってその結果、量的に非常に大きな活動を人間がするようになります。そしてはびこった結果、グローバリゼーション、地球化という現象が起こってまいりまして地球全体を瞬間に見通せるような社会になりました。グローバリゼーションといい

ますけれども、それが意味を持っている空間もあれば意味を持たない空間もある。色々なことが起こります。

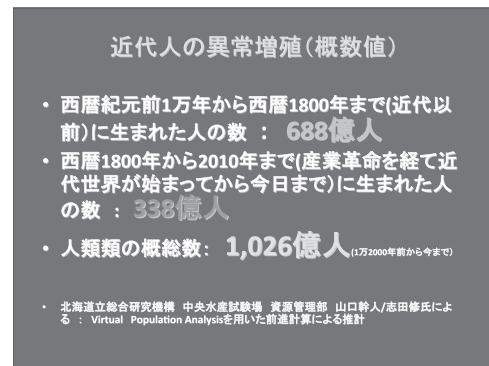
まだ地球は二つの空間の合成体で地球化が進んでいます。途上国と先進国という明らかに違う挙動を示している集団があります。そしてそれがおそらく途上国といわれているものが先進国と同じようなレベルの色々なことをしたいたら、おそらく地球は終わるんであろうと、近代は終わるんだろうと思います。途上国というのはもしかしたら先進国並みにならないかもしれませんし、なったときには近代という文明が終わるんであろうと思いますがそんな話をしてみたいと思います。

人類というのは大変苦労をしておりまます。苦労をしているのは自分たちが作り出した苦労でして、自分たち以外に悪いものはいないんですが、そうは思っていませんので、世の中に悪い人がいたり、世の中がちゃんととなってないという風に思いますけれども、ちゃんととなってないのは自分なんです。そのことをどうしたらしいだろうか、ということを少しずつかいつまんでお話しをしてみたいと思っております。

### ■近代人の異常増殖

非常に簡単に言ってしまいますと、人間という動物・ホモサピエンスが異常増殖をしました。我々は今異常増殖をしているんだと、むちゃくちやに増えちゃったんだという風に思うと色々なことがよく分かります。その異常増殖というのはおそらく400年しか続かないんじゃないだろうかと思います。地球の30億年40億年の歴史の中でたった400年しか続かない状況の中で我々は今生きているので、我々がもう無限に近いと思っているような歴史の時間は、おそらく400年という限られた時間なのかも知れないなと思うことから、色々なことを発想してみないといけないと思います。そして、その400年が異常な「成長の時代」であることをお話しします。これを定義したのは私だけじゃありませんが、単純成長の時代を近代の前期と考えたらいいんじゃないかなと思います。今を我々は環境の時代といっておりますけれども、これを近代後期だと思います。近代前期と近代後期っていうのは色々な意味ではっきり違います。そして日本のような国はもう近代後期に入ってきてるんですけども、中国やインドはまだ近代前期を追っておりまます。近代前期と近代後期では明らかに違う位置を走っている。これを調整する方法はほとんどありません。そこをどうするかということが、地球

の最大の問題だと思います。

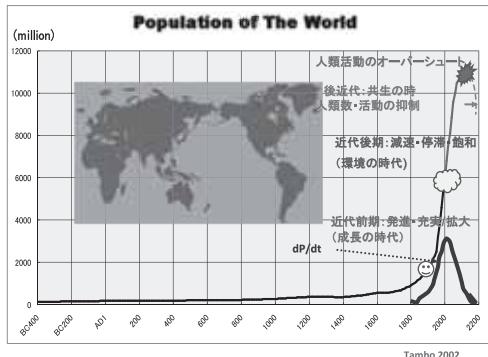


近代前期と近代後期っていうのはどこが違うんだろうかという話もちょっとしてみたいと思います。じゃあ近代後期の後はどうなるんだろうか。私は近代の次の時代、英語で言えば「Post Modern」というのが正しい表現かどうか分かりませんが、そういう言葉があります。芸術の分野ではずいぶん使い古されてきた言葉です。「Post Modern」、日本語に直すと「後近代」といったらいいと思うんですが「脱近代」とは違うんです。「脱原発」とも違うんです。脱~とは現在状態以上の知識を持たない場合に「脱~」といいます。後・Postというのは違う状態を発生することを頭の中に入れます。従って我々は「脱~」といっている間は近代なんです。「Post」といった時には違う文明を考えるんです。それを考えられる人っていうのは中々いないわけでして、人間は50年先100年先を考えて行動ができるような知恵も持っております。

考えてみれば20世紀の最初、1906年ノースカロライナの砂丘でライト兄弟の飛行機が初めて空を飛びました。そしてたった100年で地球上をこれだけ飛行機が飛んでるなんて誰も想像つきませんでした。100年前にやっと空に舞い上がった飛行機が、100年先には地球上を飛び回り月へ行きロケットで火星まで行くというようなことを平気でやるようになります。100年っていうのはそういう時間なんです。したがって100年先のことをわかる人がいるわけありませんし、だからといってそれを考えないわけにもいかない。経済学者っていうのはせいぜい数年から数十年、数十年考えている経済学者はいないと思いますけれども、特に経済をやっているときには、3年先4年先の景気の話の方がむしろ大事であるということで世の中動いております。したがって50年先っていうのはあり得ない話、30年先もあり得ない話というのがほとんどですが、それをどういう風に考えるだろうかということを今日はちょっと考えてみたいと思っております。

## ■近代前期「成長の時代」

ここにあります絵は、もうちょっと長い歴史の時間を見てみようということですが、人間が農業というも



のを持って、食物を自分の囲い込んだ空間の中で作って種を再生していく文明は5千年ぐらいの歴史を持っております。5千年ぐらいの歴史の中で、西暦1800年ぐらいまではひたすら太陽のエネルギーを使って、人間は生物（特に植物）の自然的な状況を人為的にコントロールする仕事で人口を増やしていました。そしてどこまで増えたかといいますと、頑張ったあげく、1800年頃で世界の人口が約10億になりました。約10億人、10億までこなかったんですけれども5億から10億の間ぐらいのところで文明が大きく変わりました。それはエネルギー革命が起り、産業革命が起こってそしてフランス革命が起こって両者がセットになって近代という時代に入りました。その近代という時代に入りますと、とたんに人間は急速に増えまして、今21世紀初めおそらく世界人口が一番速い速度で増えていると思います。実は私は1933年に生まれましてちょうど今80歳ですけれども、この1933年は地球の人間は20億人でしたが、2010年には70億です。私のたった80年の人生で、地球というのはこんなに相対的には小さくなつたわけとして、これは何だったんだろうかと思います。この人口増加の加速度の曲線が一番ピークになっているのが2000年直後です。これは地球人類が一番の速度で増えているという意味です。そしてこの後どうなるのかというと、無限に増える訳ありませんので、どっかで終わるんです。こういう増え方は、どっかで増えることに対する抵抗も増えますから抵抗増大によって止まってしまうんです。止まってしまう時に、ちょうどうまく止まってくれればいいんですけど、頑張りすぎるとオーバーシュート、必要以上に人口が増えてしまうと今度は崩壊してしまいます。人口が落ちるんです。地球人類というの未だかつて人口を総体として落としたことがありません。我々は人口を落とすという文明を知りません。

小さな文明とか一つの国が滅びるということはたくさんありました。しかしトータルとして種としてのホモサピエンスが滅ったということはないんです。それをどういう風にこれから見るんだろうか、その一つの代表的な例で、たぶんその先駆者になるだろうと思っているのは日本なんです。世界で初めて大国で数千万人オーダーで人口を落とすんだろうというのは日本しかないです。そこで、日本というのは、まったく手本のない状態に世界に先駆けて飛び込んだ国だという風に考えたいと思うんですが、今日はそのことを少しお話ししてみようと思います。

近代前期というのは成長の時代でして、地球の大きさは十分ありますから頑張れば頑張った分だけ自分のテリトリーも広がりますし、資源も集めてれますし、人口も増えます。したがって成長の時代です。おそらく20世紀まではこの成長の時代は続きました。第二次世界大戦で一番大きな役割を果たしたのは日本とドイツです。後から追いかけてきて先進の国に喧嘩ふっかけて負けましたが、そしてその結果として、先進国が持っていた植民地が全部独立しちゃいました。つまり、前期と後期ではっきりと違う構造が1945年を境にして起こりました。今は当時植民地であった国々、中国・インドといったような半植民地状態でありましたこれらの国々は発展途上国と言われ、先進国がやったことをすぐ真似て、どんどん成長いたします。

科学という学問というのは真似るための技術なんです。ですから科学というのは何か立派なことのように思いますけれども、たいしたことのない人でも、その手続きを踏めばたいしたことやった人の真似ができる。のために学校教育がある。これは近代の後期の珍現象でして、学校というのはあまり賢くない人々が賢いことをやった連中のことを半ばそこそこに真似ることができる仕掛けなんです。だから学校に行ったら創造的な教育が受けられる、そんなことはあるわけないです。創造的な人間なんているわけがないんです。学校というのは創造するんではなくて、真似る仕掛けですが、真似することをたくさん上手に真似ればお互いに組み合わせて創造ができる。それを全く逆に考えて、創造的な教育をしようなんてもし考えてたらそれはもうとんでもない大間違い。

### 学校教育の普及と肥大化

マーン・トロウ

- 教育普及時代：社会の知恵 + 普通教育  
⇒高等教育（エリート教育：10%）
- 教育万能の時代：教育の標準化進む  
⇒マス化高等教育（30%）  
⇒ユーバーサル化高等教育（50%）  
行動・理解の単純化、部分化、パターン化  
バーチャル化（実験的の希薄化）
- 教育の再構成：  
高等基礎教育（読・書・算盤・ICT）  
⇒他の生涯学習（家庭+社会+環境）  
⇒複数の専門教育（複合化のために）

そんなことを平気で言う人がいっぱいいるわけです。自分で考えてみたら創造的な人間なんてたくさんいるわけがない。みんな生まれてきた時からお母さんから習い、お父さんから習い、兄弟から習って世の中をやっと生きていくわけです。学校へ行ってなにをするんだろうなんて考える必要もないわけです。真似の仕方を覚えるのが学校なんです。その真似ることにをたくさん学べば、それをまた組み合わせればいいと思います。もしかすると科学も全部そうだと思うんですが、組み合わせをどうやってやるかということでしかないんです。全くゼロから何かができるなんて途方もない学問があつたり、技術があつたりするわけがないんです。それは大変勘違いをしているんじゃないかなと思います。

### ■近代後期「環境の時代」

後期になりますと、今度は先進国の真似はできるんです。真似して成果を使おうと思ったら、どうやら世界が狭すぎて真似をして使う場所がだんだん少なくなつて来たから、同じことやつたんじやまずいじゃないかということになります。それは環境の時代だからです。つまり、同じことをやるにしても周りを考えなくちゃいけない。日本はこの狭い国土で、ものすごくたくさんのアクティビティを持ちましたから、いつでも環境に配慮しなければいけないという環境の時代に最初に突入をしたのは日本とヨーロッパです。

中国やインドは近代に対する文明の度合いがまだ進んでおりませんでしたから、周りに配慮することではなくて自分が食うための基礎的な技術を獲得することに必死でした。ところが今、ようやくそれにたどり着いて、経済もふくれ人口もふくれてきたら今度は周りが大変なもんです。ここで気の毒にと言っちゃいけませんが、かつて植民地だった国や植民地と同じような状態だった国、ブラジルも含めて途上国はこの技術を使おうと思っても我々が、先進国が、日本は先進国に一番最後に飛び込んだ国なんですけれども、使ったような格好で成果が使えないんです。使えないのに使うと必ず非難されます。先進国はみんなやつたんですが、それは昔は地球が相対的に広かったから見えなかつたんです。地球が相対的に狭くなつたのに同じことをやつたら問題が次々起こります。それは環境の時代だからです。それが近代後期です。そうすると活動を減速することがどうしても必要になる。空間は無限大じゃありませんから、そしてそれがとことんまで行つてしまつたら、もうどうにもならなくなる。

その時のキーワードに「共生」という言葉が出ます。symbiosisという言葉です。近代文明というのは共生という概念を持っておりません。持っていないか

らこそ共生なんていうことを平気で新聞でもジャーナリズムでも言うわけです。生物多様性なんていうことを言うわけです。なんで生物多様性なんてことが言われなくなったのかというと、そんなもの全然考慮しないで近代が動いたから。その挙げ句の果て気がついたと言うだけです。そういうようなことを色々考えたときに、もし本当に共生の時代ということがあるとすれば、実はそれは近代じゃないんです。共生をベースにした要するに人と人がちゃんと調整するというのは、中世にはたぶんあったと思います。エネルギーもないですし物資もそんなに使えませんから、お互いに調整しなければならない。そのために宗教というがんじがらめのシステムがありました。人間の行動を宗教によってコントロールしました。そして、むちゃくちやにものを使わぬことを教えました。ところがものを使うことができる近代になると、宗教はどんどん衰退いたします。そして大成長の先に何が起るんだろうかと、共生という話が出てくるんですが、つまり共生をするということは自分が遠慮することですから、もっとおっかしいのは自分も死ななきゃいけないんです。自分が死なないで、ほかの生物と一緒に共生するなんてことはできっこないです。だから人間、自分の数を減らさなくちゃいけないわけです。つまり色んなことがある論調の中で、「共死」共に死ぬ、それを書いているジャーナリズムは全くありません。鳥取環境大学の学長さんがそういう本を書いていたことがありますけれども、共生とは共死と背中合わせの言葉なんです。そういうこともなく自分だけが正しいということの環境のお話をすると、それをエコホーリックといいます。環境からしかものを考えられない人、これがいわゆるエコホーリックなんです。執着狂なんです。自分が死ぬのが一番環境のためにいいわけなんですが、そうは思いません。そういう色んな物質的な精神的な難しい問題に我々は直面している訳です。それでは先に行けないということになります。

このような問題が発生したのが近代人の異常増殖によることなんですが、どのくらいの数がいたんだろうという話しになります。ここにあります絵は、私が所属しております道立総合研究機構本部に水産試験場の山口さんという主幹が勤務していました、計算していただいた数字です。色んな話はあるんですがちゃんとした計算過程を書いたものを私は見たことがなかったものですから、ホモサピエンスってどのぐらいいたのか計算してくれないかと相談をしましたら、2ヶ月後ぐらいに、ちょっと精度が悪いかもしませんがと言われ、この数字を出してくれたんです。今から10万年前、人によってはもうちょっと前ですね20万年近く前という人もいるんですが、アフリカの地溝帯から

アダムとイヴが出てきて、今地球上に分布しているっていうのは、我々ホモサピエンス人類10万年の歴史なんですけれども、約千億人いたんじゃないかっていう数字なんです。つまり我々の仲間、同じ仲間ホモサピエンス黒人も白人も黄色いやつも全部入れて千億人のホモサピエンスがいたんじゃないだろうかっていう数字です。そのうち700億人約10分の7、70パーセントくらいは産業革命の前の農業時代まで生きたんだろうと思います。産業革命が起こってから300年間、1800年から今までに生まれたのは350億人、つまり10万年いた人の半分がたった300年間にいたということです。10万年と300年ですから。しかもその比率が1対0.5というんですから、いかに近代になって人間がむちゃくちゃに増えたかっていうことがお分かりいただけると思うんです。すべての問題はここから発生しております。これを別にして、我々は問題を考えることは全くできないんで、このことを解決すれば、むしろこのことによって地球人類が何かすごい疫病か、隕石の衝突かなどでボカーンと半分死んじゃったら問題は全部解決しちゃいます。つまりは自分はけがしない、自分は死なない、自分はいい暮らしをできることを前提にして、環境を議論したり、色々なことをするわけです。しかも、のためにエネルギーも欲しい、食い物も欲しいと言っているんです。でそれがいかに無茶なことなのかっていうことがこの数字なんです。

## ■近代文明

近代文明っていうのは、ここにもありますように科学技術というものをベースにした文明です。実は科学ってなんですかって先ほどちょっと申し上げましたが、学習可能な文明なんです。真似をすることができる。真似っていうことは一人や二人の天才、秀才が真似できてもこれはだめなんです。そこそこのっていうか、8割方7割方の連中がクリアできる程度の真似が基本に無ければ社会は維持できません。したがって、大衆社会というのが当然発生するわけです。

### 近代文明：科学技術準拠：学習(真似)文明

- 科学・技術先導：要素原理型、学習可能、学校教育水準基準の単純化許容、精密化は細分化による
- 近代産業：単様で高速大量輸送に支えられ、大型化しようとする：学習・模倣による技術の拡散移行(防衛特許)
- 成長型社会：成長が駆動力として働き、個々の産業の成長が、総和として人類の福祉と健康を増進した(人口の大増加)：経済成長を唯一の目標とした時代
- エネルギーと資源の多消費：生物個体(ヒト)のエネルギー/資源利用効率の大低下
- ヒューマニズムの時代：人間の卓越、ヒトヒトでない生物の2種類が地球上にいる(極端な人種差別も)

科学技術というのは学習可能な文明なんです。学習可

能とはどういうことかというと、ある原理を基にして、ある手順を作るわけです。一定の手順に従えば一定の結論に達する。これは科学ですし学問なんです。そしてそれをやるシステムが学校教育なんです。だから近代社会で最初に作るのは初等教育です。中等教育・高等教育・専門教育までで、初めて近代的な社会ができるわけです。途上国はまず最初に字を覚える教育から始めます。ところがそういうものすごい数の人がいる学習っていうのは、ものすごい能力でない、ものすごくっていうのは変ですね、能力をたくさん持っているわけでもない人がやる訳ですから、難しいことを教えても分かりません。だから単純化しなくちゃいけないんです。学校教育っていうのは単純化です。単純化できないときは、縦に割って部分しか教えません。大学高等教育の学部学科システムです。化学をやってる人は力学を知らない。経済をやっている人は自然環境なんて勉強したこともない。それでも、それぞれがみんなで飯を食って偉そうな顔をして社会を維持してるつもりになっている。非常に単純な社会を縦割りに作らなければ分業を基本にした近代社会はできないですから、近代社会は縦割り社会です。縦割り社会を横につなごうっていうのはスローガンであって、それを完全に横につなぐ近代社会なんてありえない。分業っていうのは、近代社会を支えている一番の土台骨であり縦割り社会です。学部学科システムであり道庁でいえば部であり、国であれば省庁である。しかもそれを支える仕組みはどうしたらいいかっていうと、近代っていうのは非常に単純でなければいけませんから、作業も単純です。あるものだけやってる。あるものだけをやっていても総体に間に合いませんから、ものを交換しなければなりません。交換するための地域が大きくなってくれば高速大量輸送でものを運んでこなければなりません。それから近代の特徴っていうのは単純な作業、鉄工業であるとか化学産業、生産業とか農業です。農業だって、お百姓さんの農業と農産業っていうのは全く違います。今世界を動かしているのはアメリカ、カナダ、オーストラリアというような巨大農産業でして、決して中小農業ではありません。中小のようなものだと、この世界人口食わしていくないです。そういう中で、色々なことをやる長距離高速大量輸送というようなシステムが必要です。だから飛行機になり新幹線になって、おそらくその先がもうなければ、そのシステムはもう終わるっていうことがだんだん見えてきました。成長させて思うのが、その成長ということを目的にして部分的な最適化をうまくやることによって、社会というものを維持するエネルギーを確保する。要するに、経済成長をただ一つの目標とした時代というのが近代です。そのためには、エネルギーと資

源がたくさん必要です。

金が儲かった、これはちょっと俗な言葉ですが、もう少し丸めれば、一人あたりの国家のGDPが上がったということは、GDPと同じ大きさの資源を消費したということが裏側にあります。つまり経済活動が上がったということと資源消費とは全く裏と表の現象で、科学技術の発展というのは、その割合が1:1ではなくて1:1.2ぐらいまで、1.2まで行くかわかりませんけれども、わずかに5%か10%改善されたっていうのは科学技術の進化なんです。だからFordが自動車を作つてトヨタが自動車を作つたところでのエネルギーと鉄の使い方と、上がつた収入っていうのはおそらく20%も違わないんです。ようするに、資源をどうやって安く手に入れるかっていう議論はありますけれども、資源を使った、水を使った、エネルギーを使ったということと、金を稼いだっていうことは裏腹な現象でして、その中で我々はようやく成り立つますから、資源とエネルギーがなくなればその文明はなくなるわけです。それが間近とはいいません。おそらく今世紀の終わりにもう無くなることが見えてきていることに、だんだんみんなが気がついてきてるからこそ世界中で色んなことが起こっている訳です。

それからもう一つ非常に大事なことがあります。一番下に書いてありますヒューマニズムという言葉があります。これはあの産業革命というエネルギー革命、動力革命と対になった言葉です。動力革命とは最初は水が流れていって、風が吹いている所に造つた水車と風車の所でしか粉をひいたりものを作つたりできなかつたのに、エンジンというものをジェームズ・ワットが作り、燃料を運んでくれば運んでいった先どこででも動力が使える。それが産業革命です。第一次の産業革命です。したがつて、動力をどこへでも持つてこれるということによって、産業が見て近代がスタートしました。その次に何が起つたかというと、20世紀に入りまして今度は電気を使ってというのが基本になるわけです。電気というのは、ボタンを押したら1秒間で地球を7周り半するんです。1秒間に地球を7周り半するということは電線さえひっぱつとけば地球上どこへでも瞬間に動力を運べる、これは第二次エネルギー革命です。つまり、第一次エネルギー革命はヨーロッパで起つりました。第二次エネルギー革命のチャンピオンはアメリカです。そして我々は今電気を節約しよう言つているときに、この電気を節約する、電気というのはエネルギーじゃないんです。エネルギーを運ぶ媒体なんです。ですから電気というのはそういうものだと考えてください。あと水の話もちょっとしますが、水というのは水を使うということはほとんどありません。我々は一日2リッター水があれば生きてい

けます。でも我々は200リッターの水を使ってるわけですから、水は本当は電気と同じ媒体なんです。水を使って何かやらかしてるんです。やらかすことと、本当にそれでなきゃならないものではないんです。ほかのものでも十分なんです。でも電気を使うとものすごく便利になるんです。

その時に色々な事が起つたときに、人の挙動に大きな影響を示すのは人文学です。自然科学は近代の学問で、おそらく学問になつたのは、ルネッサンスから以降だと思います。それまでは学問というのは哲学だったわけですから、そうすると学問の主体は人文学なんです。ヒューマニティーなんです。今、我々は学問というと科学を考えますけれども、ヒューマニティー、それは文学でもなければ何でもないわけで、要するに人文学なんです。それを色んな風に持ち出してきた裏側の方がフランス革命です。ものすごく思ひ上がつた人間中心の考え方、近代思考の中心にヒューマニズムというのがあります。そのヒューマニズムというのは実は人と人でないものを明らかに区別する、つまり人間というものは卓越した存在であると考えるわけです。だから我々は他の動物と違うと考えたわけです。そのことによって科学が発達しました。だから日本に科学は発達しなかつたんです。それは日本人はあらゆるものと自分は一体だと思っている、今でも思っています。多神教ですから。一神教の国の中で人間というものは特別に神によって祝福されたものだつていう発想があつて、そしてヒューマニズムができる、実は人と人でない区別の境が、明らかに意識されたわけです。もし我々が人体実験やつたら、人体解剖やつたら死刑ですよね。ところがウサギだとかネズミだとか犬だとかに穴空けて色んなことやっても反対する人いっぱいいますが（動物愛護者）、でもそれで医学は発達して我々は助かつたって言つてるわけですよ。だから人間と動物との間にきれいな壁を作つて我々はサイエンスというものを作りました。近代社会を作りました。もしかすると、白人と白人でない人の間に壁があつたのではないかと僕は思つてます。要するにヒューマニズムというのはどこに線を引いたかっていうことによって、さきほど言った先進国と途上国の間のその境が壊れたのが後近代っていう時代に入つたんで、ものすごく違う時代に我々は今入つてきてるんだと思ってます。

（次号に続きます。）

（文責：北海道林産技術普及協会 植杉雅幸）